

発 明 文 化 論

〈第 93 回〉

丸山 亮

伊 能 忠 敬

海の日の日、佐原の伊能忠敬記念館を訪れた。この地は東日本大震災で忠敬の旧宅をはじめ多くの家屋が被害を受けたが、それから4年たった今、町を貫く小野川沿いの建物は修理が終わり、古さを残した家並沿いに散策する観光客の姿が戻ってきた。

2018年の忠敬没後200年を前に、記念館ではプレイベントの企画展「伊能図でみる地形—海岸—」が開催されていた。館に入ってすぐ、ランドサットの衛星がとらえた日本列島を、伊能図と重ねて見せるのが目を引く。同じ縮尺の二つを交互に入れ替えていくとき、両者がほとんど同じであることに驚嘆した。ただ緯度方向ではほとんどずれがないのに対して、経度方向で若干のずれが認められる。これは当時の技術で天測により緯度が正確に把握されたのに対して、日食などを利用した時間、時刻の測定が必要な経度の誤差を、修正するのが難しかったことによる。

展示はまず忠敬本人の出自や性格を語り、後年の事績に入っていく。秀才にたけた学問好きの婿養子が、家業の成功を見届けた後、隠居して地図作りの道に進むという話は、かつて教科書で読んだ。大筋はその通りだろうが、和歌を詠む趣味人で、旅行好き、地域社会に尽くす義の人という面も、あわせ持っていたことを知る。

蔵書を紹介したパネルに目を止めた。忠敬は当時の文化人としては第一級の読書家であったと思われる。和漢の書は暦法などの専門書があるかと思えば、西洋事情の紹介書もある。各地の藩士、大名とは、地図や書物の貸し借りをする中で、知識をどんどん広げていく、好奇心が旺盛な人だった。

忠敬の地図作りは、主に海岸線を描いていくものだ。このため内陸にはほとんど手を伸ばしていない。測量は東北、北海道の南部を手始めとする第1次から、関東、東海、北陸、畿内、中国、四国、九州に至る8回の大掛かりな事業となる。そして彼が参加しなかった伊豆諸島や江戸の第9、10次の測量を経て、事業は1821年、大日本沿海輿地全図として完成を見た。忠敬はその3年前に没している。初めは費用のほとんどを自ら持った個人事業であったものが、成果を認めた幕府の御用事業になっていく。

展示からは、彼が誤差の排除に腐心した様子が伝わってくる。富士山の頂上など、目印となる方位を複数の地点で測り、この目印が一致するよう製図する。忠敬が開発させたという方位磁石、わんからしんという道具に影響が及ばぬよう、刀などの金属を遠ざける気も配っている。1メートルほどの木の棒の先に磁針計を着けたわんからしんが展示されているほか、忠敬自らがそれを手にしている絵図の展示に目をとめた。測量隊は各地で多くの人に注目されたことがうかがえる。

測量は軍事上秘しておきたい情報を入手することにもつながるため、幕府の事業といいながら、第4次測量の加賀や糸魚川など、現場の抵抗にあうこともあった。

文政11(1828)年、帰国直前のシーボルトの所持品から、国外持ち出しが厳禁されていた大日本沿海輿地全図の縮図がみつき、関係者が処罰される大事件に発展した。これは幕府の天文方、高橋景保がシーボルトから「世界周航記」を受け取った見返りとして、彼に贈ったものといわれる。シーボルトは大日本沿海輿地全図がヨーロッパの地図と比較してもその色がない出来栄だと認め、深く感銘を受けたと記している。けれども国禁を犯した高橋景保は捕えられて獄死し、シーボルトは国外追放となった。この高橋景保は、伊能忠敬が教えを受けた師である高橋至時の長男であるだけに、運命の痛ましさを感ぜられる。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)